藤原与一先生著

「小学校児童作文能力の発達」

本著は、三部から成る。中心となっているのは、「小学校同学年二学級児童六年間の作文の歩み—調査と考察—」である。

藤原先生は、「はしがき」において、「小学生が、一年生から六年生までで、作文力をどのように発展させていくものであるか。これを追っかけてみたいとの願望は、早くから私にあった。そのゆめをかなえて下さったのが、広島高等師範学校付属小学校訓導でいられた原田直茂先生である。先生のおかげで、私は、付小の同年二学級の児童のみなさんに、年々つづけて、文章を書いてもらうことができた。その結果、小学校児童の作文能力の発展をものがたる、貴重な資料が得られた。これを今、原作者各位のご諒解を得て発表する。」と述べていられる。ここには、昭和十四年十二月（一年生）から、十九年五、六月（六年生）にかけての作文（のべ四十四人の児童、各々五編の作文、計二百二十編）が収められ、そのうち男女各六名、計六十編の作文は、写真で全原文が示され、直接作品にふれることができる。

作文の題は、六か年を通した「私のおとうさん」（または「私のおかあさん」）と、応年別題、一年「（朝、学校に来るまで）」、二年「興亜奉公日」、三年「陸軍記念日」、五年「遠足」、六年「（向洋、畑作り）」の二種である。

写真原文つきの六十編一つ一つに、藤原先生のご考察を箇条書きで具体的に示してくださっている。作文の筆者への温いご配慮に裏づけされたご指摘に、本著の大きな特性がある。一人ひとりの文章に接するときの我々のあり方をも教えていただく思いがする。

さらに一年生から六年生までの歩みを通して、各学年ごとのご考察がなされ、六か年間の表現力の開花・発展への継続観察の結実をお示しくださっている。

以上を中核として、その前に序説、うしろに汎説がある。

序説では、「どうしたら自他ともにたのしい作文教室をうみだすことができるか。」という問いをお出しになり、「気がるに」やれるよう「方言表現または方言的表現の生活を、あたたかいまなこで見つめ」、「自分の心の中のことばで、自分の心を表現する」、そのために「いろいろな生活を経験させ」、おのずから発表への意欲をもつちかっていこうとなさる。作文教育に携わる者に「自分の身のたけにあった一研究を持つようにしたら、きっと指導がたのしくなろう。」と、忙しい生活の中に見出しうる研究の重要性を教えてくださる。小学校児童二学級についての六か年継続のご研究は、その具体的な例である。これは又、作文教育が広く、かつ大射程を持つという「汎作文教育」（10ページ）の見地からも意義づけられる。

「汎説　作文教育の道」として、次の六か条について、お考えを述べていられる。

第一「いかにして、その深刻な生活経験をとらえさせるか。」が、指導の第一歩になる。

第二　作文指導は、すすめはげますしごとだ。

第三　相手はだれしも、もともと作文ずきであったのを、忘れてはならない。

第四　やがて伸びるのだ、と期待する。

第五　一つだけ、つねに言う。「心からのことばで書け。」、と。

第六　短作文教育を生かす。

以上の三部が一体となって有機的体系をもつ。作文教育研究そのものの「たのしさ」「すばらしさ」を本著は、私どもに教えてくれる。

（昭和50・2、文化評論出版刊、A5判二六〇ページ、二五〇〇円）　（白石寿文）